

中学校第3学年 E 球技 ウ ベースボール型「ソフトボール」 朝倉市立甘木中学校

単元の目標

知識及び技能	競技の特性や行い方、基本的なバット操作や走塁など攻撃の技能、ゴロやフライの捕球と送球、定位置での守備など、技能等について理解するとともに、安定したバット操作により出塁・進塁・得点し、仲間と連携した守備で攻防を展開することができるようにする。
思考力、判断力、表現力等	攻防などの自己やチームの課題を発見し、合理的な解決に向けて運動の取り組み方を工夫するとともに、自己や仲間の考えたことを他者に伝えることができるようにする。
学びに向かう力、人間性等	ソフトボールの学習に積極的に取り組むとともに、一人ひとりの違いに応じたプレイなどを認めようとする事、健康・安全に気を配ることができるようにする。

※共：男女共習

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	評価規準	
ねらい	競技の特性や基本技能等について理解するとともに、自己の課題を見つけることができる。	安定したバット操作、走塁、ボール操作、連携した守備を身に付け、自分にあった条件のもと、ゲームを楽しむことができる。					身につけた技能を生かして、チーム全員が自己の技能レベルに応じて活躍することができるよう、個人やチームに応じた条件を考え、お互いの違いを認め合いながらゲームを楽しむことができる。				【知識・技能】 ①基本的なバット操作や走塁など攻撃の技能、ゴロやフライの捕球と送球、定位置での守備など動きのポイントを理解している。 ②安定したバット操作と走塁、ボール操作と連携した守備で攻防を展開している。
導入	準備運動、キャッチボールを行う。	共：心と体をほぐすために、チームでコミュニケーションをとりながら準備運動を行う（ペアやチームでキャッチボールやバッティング練習、各種ノックでの守備練習など）。					チームの構成：1チーム男女混合の8～9名 ゲーム：A対B・C対D（各チーム攻防のプレイ時間を保証するため、時間制で行う。） 共：①2回表裏終了後、さらにチーム全員が活躍するためにはどのように条件の付加修正を行えば良いか、チームで話し合いを行う。 攻撃：方法、道具など 守備：守備位置など ②考えた条件を対戦チームに伝え、ア：両チーム共通で設定すること、イ：チームごとに設定すること、を確認してゲームを再開する。 ③それ以降も、随時条件の付加修正を行うことも可能とする。				
展開	競技の特性や行い方、基本的な動きについて理解できるように、ICT機器等を使って説明する。	動きのポイントを提示し、バッティング及び守備練習を行う。 ・ティーバッティング ・トスバッティング ・シートノック 共：生徒が自分の技能に合わせて練習に取り組むことができるように、金属及びプラスチック製のバット、通常及び柔らかいボール、ティーを準備し、生徒が選択できるようにする。 共：守備において、それぞれの技能レベルを考慮し、適材適所で守備位置につくことができるよう話し合いを行う。					ゲーム：A対C・B対D、A対D・B対Cも同様に行う。				【思考・判断・表現】 ①ボール操作及びボールを持たないときの動きにおいて、自己や仲間の課題を発見し、解決できるようにしている。 ②それぞれの技能レベルに応じて、自分や仲間が全力でゲームを楽しむための方法を見つけ、それを仲間に伝えている。
閉	バット操作や守備の課題を見つけるために、試しのゲームを行う。 1チーム8～9名（男女混合）とする。プレイ時間を保障するため、時間制で行う。	練習した動きを全員で確かめるゲームを行う。 共：生徒が練習の成果を実感できるように、条件付きのゲームを提示し、対戦相手との話し合いのもとに選択できるようにする。 ○条件⇒方法A～Cと道具ア～ウを選択し、相手に宣言する。 方法A：通常のルール B：トスによる C：ティーの使用 道具ア：金属バット・通常のボール イ：プラスチック製バット・柔らかいボール ウ：金属バット・柔らかいボール					用いた条件のもと、自分や仲間が活躍できたことを確かめるために、2回表裏とそれ以降の様子を比較し、条件の工夫の効果を確かめる。 次時学習への見通しをもつことができるように、効果のある条件の工夫について全員で共有する。				
終末	今後の学習の見通しをもつことができるように、バット操作や走塁、また守備の動きについての課題を話し合う。	整理運動、振り返り（授業後アンケート）の記入									【主体的に学習に取り組む態度】 ①学習に積極的に取り組むもうとしている。 ②一人ひとりの違いに応じたプレイを認め、マナーを守ったり相手の健闘を認めたりして、フェアなプレイを守ろうとしている。

知識・技能		①	①	②				②	
思・判・表					①	①②	②		②
主	①								②

実践事例

生徒一人ひとりが違いを認めて楽しむことができる場や条件の工夫

中学校第3学年 E 球技 ウ ベースボール型「ソフトボール」

朝倉市立甘木中学校

1 単元の目標

○競技の特性や行い方、基本的なバット操作や走塁など攻撃の技能、ゴロやフライの捕球と送球、定位置での守備など、技能等について理解するとともに、安定したバット操作により出塁・進塁・得点し、仲間と連携した守備で攻防を展開することができるようにする。 【知識及び技能】

○攻防などの自己やチームの課題を発見し、合理的な解決に向けて運動の取り組み方を工夫するとともに、自己や仲間の考えたことを他者に伝えることができるようにする。【思考力、判断力、表現力等】

○ソフトボールの学習に積極的に取り組むとともに、一人ひとりの違いに応じたプレイなどを認めようとする事、健康・安全に気を配ることができるようにする。 【学びに向かう力、人間性等】

2 共生を基盤とした授業づくりにおける仕掛け

(1) 生徒一人ひとりの技能に応じて、それぞれが活躍できるチーム作りや用具・場の工夫

①グルーピング：スキルテストや試しのゲームの結果をもとに、チームごとの技能の程度や男女の割合が均等になるようにチームを編成した。

②用具や場：A：正式ルールの金属バット・ボール、B：ティーボール用のバット・ボール、C：プラスチック製のカラーバット・柔らかいゴムボール、を各チームに準備し、生徒一人ひとりが技能を發揮しやすい用具を選択できるようにした。また、バッティング時には、D：ティーの使用も可とし、バットにボールが当たる（ヒットを打つことができる）確率を高めた。



また、技能差にかかわらず、誰もが活躍できるように、E：様々な条件が記されたサイコロを準備した。サイコロは2種類あり、内容は以下の通りである。

攻撃時使用：逆敬遠、三振なし、ランナー進塁の3つ

守備時使用：敬遠、プラスチック製と柔らかいボール使用、2塁までの進塁制限、ティーボール用使用、二振でアウト、一振でアウトの6つ

サイコロは、ゲーム中に使用できる回数を制限し、チームで話し合っ使用することとした。

(2) 男女共修において「わかる・できる」楽しさを味わうことのできる仕掛け

練習において、バッティング練習では、野球経験者もしくはバッティングが得意な生徒がトスを上げたり、ポイント表を使ってフォームをアドバイスしたり、道具の選択に関してアドバイスしたりするようにした。ポイント表とチェックリストを準備し、正しく技能の動作を行うことができているか確認できるようにした。

守備練習においては、生徒個々の技能が發揮できるように守備位置を考えるよう促した。ボールがよく飛んでくる守備位置を守る生徒、打者の技能を考慮した守備位置の工夫など、適宜助言を行った。



【道具の選択に関してアドバイスをする姿】

ゲームにおいて、攻撃ではチャンス場面で、打席に入った生徒の道具の選択が適切かどうか、その

時の状況を確認して発問し、生徒の思考を促した。守備については、打者が右打ちか左打ちか、選択した道具が何かにより、守備位置を確認する時間を設け、チームの話し合い活動を大切にした。さらに、両チームともに、自分や仲間が活躍できたことを確かめるために、2回表裏とそれ以降の様子を比較し、条件の工夫の効果を確認する時間を設けた。

また、単元を進めていく中で、攻撃側のチャンス及び守備側のピンチの場面で、苦手意識のある生徒も楽しく取り組むことができるよう、サイコロを活用した。(前項E) サイコロを使うことで、苦手意識のある生徒も活躍しやすい状態をつくることができた。

(3) 生徒同士の学び合い、授業者と生徒の関わりの効果

生徒同士の学び合いでは、野球の得意な生徒が苦手な生徒に、男女関係なく積極的に教えたり励ましたりする姿が多く見られた。基本的技能について、チーム内で互いの経験やポイント表を基にアドバイスをし合ったり、失敗したら励まし合ったり成功したら称賛し合ったりすることができていた。その結果個人の基本技能や連携した守備の技能が向上した。



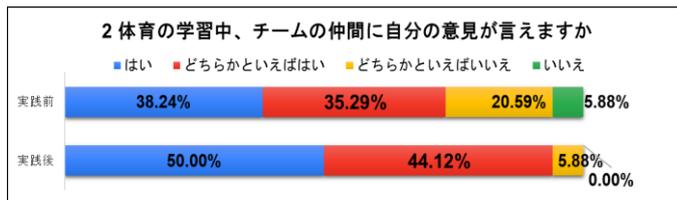
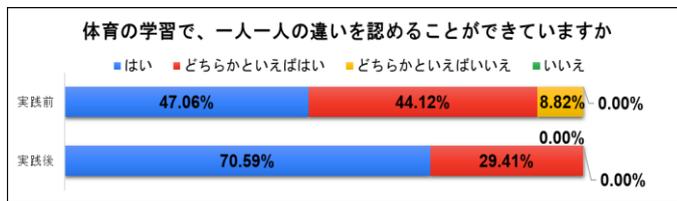
【お互いに声をかけ合って練習する姿】

授業者と生徒の関わりについては、生徒が道具の選択や守備位置の工夫について様々な考えをもつことができるように、適切に発問するよう心掛けた。これにより、生徒は「私は金属の方が打ちやすいと思う。」、「ファーストに捕りやすいボールを投げるから安心して守備できるよ。」など、自分の考えを積極的に伝えたり、お互いに意見を交換したりしてゲームを行うことができた。

3 成果と課題

(1) 成果

- チームごとの技能の程度や男女の割合が均等になるようにチームを編成したことや、用具や場を工夫したことにより、生徒全員が意欲的にゲームを行うことができた。これにより、学習後に実施したアンケート(4件法)では、一人ひとりの違いを認めることができた生徒が増えた。
- 生徒同士の学び合いに対する適切な称賛や、生徒の「考えよう。」「伝えよう」という意欲や意識を高める発問により、自分の意見をチーム内の生徒に積極的に伝えようとする生徒が増えた。



(2) 課題

- 生徒一人ひとりが違いを「認める」ことについて、今回は「チーム間の技能差をなくす。」ことを仕掛けとして考えたが、今後は、「チーム間の技能差があっても、違いを『認める』」ことができるような授業づくりに取り組んでいきたい。そのためには、生徒が今以上に学び合うことができる場や用具、ルール工夫、特に、技能差があっても拮抗する場面が生じるゲームの在り方について教材研究に努めたい。